

越境と帰還：ローベルト・ムージル短篇集『合一』 における身体

大野, 奈美
九州大学大学院

<https://hdl.handle.net/2324/7391533>

出版情報：九州ドイツ文学. 38, pp.1-25, 2024-10-31. VEREIN FÜR GERMANISTIK-KYUSHU
バージョン：
権利関係：



越境と帰還

—— ローベルト・ムージル短篇集『合一』における身体 ——

大 野 奈 美

序

本論は、『愛の完成』¹⁾と『静かなヴェロニカの誘惑』²⁾の二編からなるローベルト・ムージルの短篇集『合一』(1911)を対象とし、両作品に共通して見られる身体および個人性への回帰を、時空間とのかかわりを手がかりに考察する。前者は不貞によって、後者は相手の死によって愛する人との個人性を超越した合一が果たされるとする。これらの作品の難解な理論を分析するにあたって、身体は重要な概念である。身体は、空間内で個人を領域づけ、他から区別するものであると同時に、感覚を通じて個人の内部と外部とを媒介するものだからだ。この両義性のために、合一に際して身体は障害であると同時に媒介であり、身体感覚を通じた身体性の破棄によって合一が果たされると過去の研究ではみなされてきた。

例えば古井³⁾は物理的境界としての「肉体」と、精神的境界としての「肉体の自己感覚」とが「すべて引き裂かれ」ることによって、「何者でもなくなった」境地に至り、そこで合一が果たされると述べる。境界であると同時に侵食の場である「皮膚＝身体」を手がかりに『合一』両作品における自他の分離と融合を詳細に分析する北島⁴⁾は、現実の枠組みを仮構のものと認識することによって、身体性を媒介として身体性を超えた合一の領域へと達することが可能となると主張する。人間学の観点から論究を行うレーンカー⁵⁾は、身体において個別的な自己関係が破壊されることによって、特殊な意味で非個別的な自己、すなわちそれが身体においてのみ感覚されるという点でしか個別的ではない自己が経験されると主張する。

だが『合一』のいずれの作品においても、個人性を超えた合一の瞬間ののちに主人公は身体感覚を通じて再び個人へと戻ってくる。合一へと至る過程の考察に力点を置くこれらの研究においては、こうした回帰については十分な論究がなされていない。合一が身体性の喪失とそれを通じた個人性の喪失によって可能となるにもかかわらず、身体が感覚を通じて個人を呼び戻すことはいかなる意味を有するのだろうか。また、ベンティーン⁶⁾が指摘するように、ムージルのテキストにおいては、皮膚と自己意識とが密接に関係していると同時に、個人性を形成する断片が非個人的な外部の介入を必要とすることが強調されている。身体と密接に結びついた個人性が非個人的なものによって形成されているとすれば、こうした個人性への回帰はなぜ生じねばならないのだろうか。また、身体的に規定された個人性が有意味的なものとして作用するとすれば、身体およびそれに規定される個人

性は、合一を目指す物語のなかで、媒介とも克服すべき障害とも異なる性質を有するのではないだろうか。

以上の問いを明らかにするために、本論は第一章では『愛の完成』、第二章では『ヴェロニカ』を集中的に検討し、時間的要素によって形成された個人の内面性が身体を通じていかに空間化されるか、また空間が身体を通じていかに個人を特徴づけるかについて論究する。『愛の完成』では、自らがそれであると感覚される統一体としての「自我」における特定性が個人の有する制限性に直結している。それゆえ他から区別された個人としての感覚を喪失することが目指される。これに対して、『ヴェロニカ』ではこうした自我がはじめから失われている。『ヴェロニカ』において、思考や行為等の主体である「自分自身」 *sich selbst* は同時に、その人によって「所有」 *haben* される⁷⁾ 客体でもある。それゆえ「自分自身」を所有し、身体を通じて感覚する主体も存在している。「自分自身」は所有や認識の客体であるために、「自分自身」を所有する主体は意思決定等の場における主体でないために、どちらも「私である」とは言えない。したがって「自我」 *das Ich* という語を用いるのは不適當であると考えられる。本論においては、さしあたり他者や外界から区別されたものとして「自己」 *das Selbst* を使用し、両者を峻別する必要がある場合には特に前者を「人格」 *die Person* と表記する。『ヴェロニカ』ではこの両者の分裂を統一し、『愛の完成』とは対照的に、「私である」という感覚の回復へと向かうのである。身体および個人性への回帰に着目することにより、本論はかように対照的な道を辿る『愛の完成』と『ヴェロニカ』を、一方は広がり、一方は高さをめぐる、同じ中心を持つ二つの円環として描き出す。このことによって、「この本の誤りは、一冊の本であることだ。表紙、背表紙、ページ番号があることだ。この中の数ページをガラス板に挟んで広げ、ときどき入れ替えるべきだ。」⁸⁾ というムージル自身の言及のために比較的軽視されてきた物語の構造に新たな光を当てることができるのではないだろうか。

1. 広がり出るクラウドディーネ：『愛の完成』

1-1. 不真と身体

『愛の完成』において主人公クラウドディーネが求める完成形の愛は、「子供が神について、神さまは大きいんだと言うような」(426) 性質のものとしてイメージされている。こうした愛は、それを構想するクラウドディーネの、「全ての人のためのようにありながら、それでもやはり一人のためのようにのみ存在しうる」(425ff.) というあり方によって可能となる。彼女が合一を目指す相手である夫がほとんど登場せず、具体的な人物としての描写がクラウドディーネに限られていることが示すように、『愛の完成』という小説が巡っているのは、二人の間の関係というよりもむしろ、一人の人間の存在に関する問題なのである。神という言葉によってイメージされる、普遍的な愛に個人が至ろうとすると、個人性はいかにして超越されるのだろうか。また、個人の内面が普遍的なものへと結びつくとき、外的・身体的な個人性はいかなるものとして存在するのだろうか。

この問いを考察するにあたって、作中において合一を達成するための手段とみなされる「不貞」に着目することは有用である。というのも、『愛の完成』における不貞は単に夫以外の相手と関係を持つという行為のみを指すのではなく、クラウドディーネ単独の行為でもありうるからだ。つまり、不貞という行為は、必ずしも他者を必要とするのではなく、一人の人間のみにかかわるものでもありうるのである。作中の語彙はこのことを明確に示している。クラウドディーネは作中において実際に夫以外の男と関係を持つことを試みるが、しかしそれにもかかわらず「不貞」を表す語として、Ehebruch は一度も用いられておらず、Untreue、Treubruch または Treulosigkeit が用いられている。したがって、作中における不貞は婚姻関係の破壊ではなく treu の破壊あるいは喪失を、すなわち kernholzartig fest な⁹⁾、堅固な、不変のものを損なうこと、あるいは持たないことを意味している。一方で、不貞という言葉が持つ、外部のものを介した Treue の破壊というイメージが完全に失われるわけではない。クラウドディーネ単独での不貞は、疎遠なものとなった過去の自身との関係において生じる。

[……] 人はときおり何か、疎遠なものを遠くに見る、それからそちらへと近づいていき、あるところでそれは自身の生活圏内に歩み入ってくる、しかしかつていた場所は、いまでは奇妙にも空虚なのだ、あるいは、昨日はあれこれのことをしたと想像するだけで良い。ある瞬間は常に深淵のようなもので、その前には病んだ、疎遠な、色あせた人が残されるが、ただそのことを考えないだけで、——そして彼女には突然、[……] 自分の全生涯がこの不可解な、絶え間ない不貞 (Treubruch) に支配されているように思われた、この不貞によって人は、全ての他者たちにとっては同じであり続けている一方で、理由も分からず、あらゆる瞬間に自身を自分自身から引き離すのだ [……]。(401ff.)

ここでクラウドディーネが「不貞」と呼ぶものは「かつて彼女自身の肉体のように近くで彼女を包んでいた過去をよそよしく感じられる軽さ」(401)である。「夫と知り合った瞬間」(373)から、「もはやかつて起こったことは重要ではなく、そこから今生じるものだけが重要だった」(373)とみなし、「私はあなた〔夫〕の中であってようやく何かなんだ、あなたを介してようやく何かなんだ」(403)と感じるクラウドディーネにとって、夫との関係において起こる出来事は彼女の人格的内容を形成する主たる要素をなしていた。クラウドディーネが自身の「貞操／不変のもの」Treueを「絶え間なき前進による平衡」(377)とみなしていることが示すように、こうした出来事は、過去から現在へと絶え間なく連続することによってクラウドディーネの同一性を担保する核となりうる。それゆえクラウドディーネの過去は、それが彼女の人格的内容を決定づけ、境界づけを行うものとして作用する限りにおいて¹⁰⁾、空間内に物理的に個人の領域画定を行う「肉体」と重ねられる。しかしながらクラウドディーネは「本来であれば、彼らの卑しい生活の一片を示す様々な特性によって彼女に反感を起こさせる」(398)娘の教師たちに対して、「彼女を包み込む、偶然と事

実からなる交換可能な覆いによって彼らから分かれたれているにすぎない」(402)と感じる。過去となった「偶然と事実」が絶えず現在から切り離され、疎遠なものとみなされることによって、過去は彼女自身が「それである」ところの肉体から、表面的なものにすぎない「覆い」にまで制限され、完全に外部化される。ここで出来事と個人とは完全に分離可能なものとして現れる。

過去が個人の輪郭という役割を果たしうるのは、過去がすでに確定された、変更できないものであることに依っている。過去の自身が現在の自身にとって疎遠であるという感覚は、過去の自身から、またそれに伴って過去の持つこのような性質から自分自身を引き離して考えることを意味する。したがって、過去の持つ不変性は個人に効果を及ぼすのではなく、出来事そのものの特性に留まる。このとき個人は自我において、過去が保障してくれるはずの確固たる不変のものを喪失する。それゆえ、自らの過去に対して距離を置くことはそれ自体、「不変性の破壊」*Treu-Bruch* を意味するのである。さらに、過去の自身と現在の自身とを切り離すことによって個人における時間的連続性は破断され、未来が、未だそこに到達していないがゆえに「自分のものでない」*fremd* のと同様に、過去もまた、現在の自分との繋がりが絶えず失われているために常に「疎遠な」*fremd* のものになり続けている。あらゆる瞬間に生じるこの断絶そのものを「心変わり」、すなわち「変わらぬ心を挫く」*die Treue brechen* ことと捉えることもできよう。

自身にとって決定的であると思われた夫との出会いもまた、自己に直接的なかかわりを持たぬ表面的なものであると悟ったとき、クラウドイーネは出来事に依らない夫との結びつきを求める。このとき夫との出会いという出来事から連なるものとしての現在は、クラウドイーネにとって、「入り乱れた沈黙の中で自分自身を聴きとるために刻み込む、きしむ線のようなものにしか」(379ff.) 感じられなくなる。出来事に対して自身を切り離すとき、過去の継続としての現在は、外的に形成された自己像の輪郭を担保するものにすぎなくなる。クラウドイーネはこの輪郭を「聴きとる」、つまり身体において外部から受け入れ内面化することによってのみ、他から区別された「自分自身」を感じ取ることができるのである。

『愛の完成』において自我は、時間とのかかわりにおいてのみ自我として感覚されるものと考えられており、時間的要素から独立した個人的特性は根本的に否定されている。つまり、自我はそれ自体では本来、他から区別される要素を持たないものとして表されている。したがってクラウドイーネが望む「究極の、出来事のない内面性において互いのものになる」(403) という合一の形は、時間とのかかわりから自身を分離させることによってはじめて可能となるのであり、それゆえに時間的に形成された自己を他から区別されたものとして継続させることは、夫との愛を数ある可能性の一つにすぎぬものに押しとどめ、究極の合一への道を阻むという意味で「不貞」へと転じるのである。

さらに、「決定し続ける人生は無造作にどこかで手足と手足を鉤でとめて、人は行動できなくなってしまう」(421)。現在において決定されるものは、過去から継続されたものであるがゆえに、否応なく過去から影響を受ける。それゆえ現在が過去から連続したもので

ある限りにおいて、行動の余地はあらかじめ奪われており、真に自由な意思決定はそもそも存在しない。現在はそれ自体、個人に対して他の可能性を閉ざし、ただ一つの定められた道に縛り付ける障害となる。

このような意識を通じてクラウディーネは「自身をはじめて根底に至るまで不明瞭だと感じ、彼女の愛における、顔のない、根を、絶対性を破壊する、この究極の自己感を感じた」(416)。この自己感は、「普段は繰り返し彼女を自分自身にしていたが、〔今は〕彼女を誰からも区別しなかった」(416)。しかしながら、時間的要素を分離するだけでは不十分である。参事官との不貞行為を試みるとき、クラウディーネは「ここではまだ可能性との戯れにすぎないものが、彼のもとでは現実になる定めなのだ」(403)と考える。個人性のない自我を現実のものとして捉えるためには、現実的な時空間とのかかわりが必要となるのである。しかしながら、現実の時空間においてなされる以上、その行為は時間性から逃れることはできない。決定する現在は絶えず個人を固定するからだ。したがって、時間性から切り離された自我を現実化するためには、彼女自身の行為とは異なる方法が求められる。それは自身の肉体を他人の自由にすることによって果たされる。

もしかすると彼女はそのとき、この肉体 (Leib) を愛する人に捧げたいという願いのほかには何も抱いていなかったのかもしれない、しかし精神的な価値の深刻な不確かさに全身をわななかされて彼女の肉体があの見知らぬ男〔参事官〕への欲求のように彼女を捕らえた、そして自分自身の身体 (Körper) において彼女を破壊するものを被ったとしてもなお、身体を通じて自身を彼女自身として感じるだろうという可能性を見つめる一方で、[……] 自身から肉体を突き放したい、官能的な忘我の境地の無防備さである見知らぬ男に肉体を打ち倒され、ナイフを用いるかのようにこじ開けられるのを感じたい、肉体を恐怖と吐き気と暴力と意図せぬ痙攣とで満たされたいと、彼女の肉体が切なく彼女を誘惑した [……]。(413ff.)

この引用においてまず着目せねばならないのは、「肉体」Leib と「身体」Körper の区別である。『歴史的哲学事典』によれば、両者の区別は以下の通りである。

肉体 (Leib) という概念は、ドイツ語に特有の区別であり、ある身体 (Körper) を、それが魂あるものと考えられる限りにおいて、特殊な語によってその他の身体集合から際立たせるものである。[……] 中高ドイツ語の *lîp* (最初は未分化の「肉体と生」) がしだいに特定の人物を表す、魂ある生きた身体という意味を獲得したのに対し、*corpus* がラテン語において既に有していた広い意味でドイツ語化したことによってこの区別が生じた。このように、「肉体」という表現はむしろ肉体と魂との関係を論じるのに役立ち、それに対して身体は必ずしも両者の合一を論じるものではなく、より一般的に精神と区別される。¹¹⁾

すなわち、「肉体」Leibが内面的なもの、精神的なものを包含した概念であるのに対し、「身体」Körperはそれを所有する人間から切り離された客観的な体を意味する。この区別は『愛の完成』においても表れている。¹²⁾ 先の引用において、過去がクラウドイーネを包む「肉体」あるいは「覆い」と表現されていることを確認したように、過去はクラウドイーネにとって他者から自分自身を区別する輪郭を形成し、この意味で、物理的空間において他者から自分自身を区別する身体の輪郭と一体化する。したがって、「肉体」と「身体」との区別は先に確認した時間との距離感によって決定される。すなわち、自身を時間と結びつけて考える場合、時間的要素は自我の内に必然的に内包され、この両者は一体をなしているが、自我と時間とを切り離して考える場合、出来事によって形成された輪郭は自我に対して外部化され、自我をその内部に閉じ込める拘束となる。それゆえ『愛の完成』においては、「肉体」はもちろん「身体」もまた、必ずしも空間内に幾何学的に存在する物体を意味するのではない。むしろ心理的な構築物としての側面を多分に包含しているのである。端的に言えば、自他を区別する要素を自我に対して外部化するとき、それは「身体」となる。

この区別をふまえて引用に戻ろう。自身の身体が時間的に構築された自己像と結びついているがゆえに、身体を自由を奪われ、蹂躪されることは現実における個人性の破壊を意味する。しかしながら、身体のみでは十分ではない。身体は空間において物理的に存在する個人の領域であるが、本質的には自我とは関係のないものとして、自身の外部に存在している。それゆえ、身体を相手の自由にされることによって一時的に個人性の喪失が生じたとしても、内部は手つかずであり、以前と変わらぬ身体感覚によって輪郭は容易に復元される。これに対して、肉体を捧げる場合は内面的なものまで徹底的に破壊される。また、クラウドイーネに破壊をもたらす参事官が「見知らぬ男」であることもまた重要である。クラウドイーネがどのような立場の女性であるかを知る教師たちの前では、彼らの、クラウドイーネに対して抱くイメージに基づく態度によって、クラウドイーネの輪郭は反作用的に強化される。彼らと自分を隔てるものが「交換可能な覆い」にすぎないとしても、彼らから自分を隔てるものを取り除くことはできないのである。一方で、互いに名前さえ知らぬ「見知らぬ男」の前では、クラウドイーネの姿は歪められる。「見知らぬ男」は彼女を身持ちの悪い婦人として、彼にとって都合の良いように認識する。クラウドイーネの方でも、彼の抱くイメージを受け入れ、誤解させたままにしている。このことによって、クラウドイーネの内面もこのイメージに沿うものとして再生産される。この状態にあってはじめて肉体の破壊が可能となる。個人が「全ての人のためのように」存在するには、自我から時間的要素を分離させ、自他を区別する要素を持たない境地に至ることが必要なのである。この境地にある限り、人は無条件に誰とでも結びつくことができるようになる。参事官という「誰でもよいある人」(385)に適合できることは、クラウドイーネにとって自身が「全ての人のためのように」存在することの証左となる。自分単体では個人的特性を持たないということは、相手を通じてあらゆる特性を持ちうるという可能性を意味するからだ。ここにきて「他の人のものになる」という一般的な意味での不貞は「究極の結婚」

へと転じるのである。

さらに、クラウドディーネの自我は再び個人へと戻ってくる。この感覚は、参事官が彼女に du で話しかけられて喜ぶのを見たときに生じる。それまで彼女は参事官に一貫して Sie を用いていたが、敬称の Sie は本来、敬意を示すために一人の相手に対して用いられる複数形であり、相手に対して距離を置く三人称でもある。¹³⁾『愛の完成』においてこの敬称は、参事官を「誰であっても構わない任意の一人」という位置に置き、彼の特定性を弱める役割を担っている。参事官という人間の背後にあらゆる人間が置かれているのである。この点において、Sie は敬意以上に複数性と第三者としての距離を強調する。しかし二人称に喜ぶ参事官の姿を見て、クラウドディーネの意識は個人性に引きつけられる。このときクラウドディーネは「あらゆることにかかわらず自分の身体が性的快楽で満たされる」(425) のを感じる。この快楽は彼女に、身体という満たされうる、すなわち限界づけられた領域を有することを感覚させる。それゆえこの快楽を通じて彼女は再び自身の輪郭を認識し、個人へと戻ってくる。つまり、個人は個人性を身体として外部化し放棄することによって「全ての人のためのように」存在することができ、身体感覚を通じて、身体に戻ってくることによって「一人のためのように」存在することができるのである。また、クラウドディーネは夫に対して、「私がしているすべてのことを、あなたもしている」(421) と考えている。それゆえ、それぞれが個別に「全的な人間」となることによって、個人性を超越した場においても合一を果たしうるのである。

1-2. 遠方の土地と家

一人で見知らぬ土地へ旅をすることにより、クラウドディーネは夫と離れると同時に、彼女自身の空間として形成された家を離れ、異なる空間¹⁴⁾へと移動する。夫との関係に対する考えの変容がこうした場所の移動に沿って生じることは、個人の変容が空間感覚を変容させるというだけでなく、空間それ自体が個人の視点の形成に直接作用しているということを示している。それゆえ、自己の基体としての身体と、各々の空間との関連を分析することにより、いかなる空間において合一が可能となるのか、また合一に際して身体は空間内にいかなるものとして存在するのが明らかになるだろう。

それゆえまずは、クラウドディーネにとって自身のための、また自身の空間である家の描写を確認せねばならない。

〔……〕彼女が夫を見る視線は、硬くこわばった一つの角度をなした。

確かに、人が見てとることのできる一つの角度だった。しかし、その中にあの別の、ほとんど身体的なものを感じ取ることができたのはこの二人の人間だけで、彼らにはまるでそれが、極めて硬い金属でできた筋交のように二人の間に張り渡され、彼らを彼らの場所に (auf ihren Plätzen) しっかりと引きとめ、彼らを結びつけているかのよう
に思われたのだ、彼らは互いに離れているにもかかわらず、人がほとんど感覚で感じ取れるような統一に。……それは彼らのみぞおちで支えられ、彼らはそこに圧迫を

感じた[……]この希薄な、ほとんど現実感がないのにこんなにも知覚できる感じに、かすかに震える軸にぶら下がるかのように部屋全体がぶら下がっていた。それから軸を支える二人の人間にも。(365ff)

部屋全体、すなわち彼らの感覚しうる限りの全世界は、彼女が夫と共通して持っている感覚をよりどころとしている。この感覚は、身体的な合一の感覚であることが繰り返し強調されている。周囲の事物は「彼らのためにそこに存在し」(366)ており、彼らを中心とした一つの世界を形づくっている。

冒頭からすでに合一を思わせる描写の一方で、これらは「ぶら下がって」存在しており、彼らと彼らの感覚のほかには支点を持たない。互いにすがりつく彼らの視線は綱渡りのイメージで表され、なんとか保たれているにすぎない安定と、地盤の存在しないことを示唆している。さらに、彼女は「絶え間なき前進による平衡」によって「貞操」を、すなわち「愛する人との関係」(377)を保っているということを先に述べたが、ここでイメージされる空間は「道」である。道はどこか目的地へ向かうための空間であって、留まるための空間ではない。それゆえ彼らが土台とする彼らの感覚においては、「全てが前へと押し寄せ」(377)て彼らを前進させ、彼らがそこに安住することを許さない。彼らの感覚はその不安定性のために、また同時に前進という特性のために、それを基礎として人間の本質がつくりあげられる場としては不完全なのである。

また、この感覚は彼らを結びつけると同時に彼らを各々の「場所」Platzに固定している。ボルノウが主張するように、Platzは「その中になにかが境界まで、しかし境界を越えることなくちょうど収まった、局限的な空間領域を意味する」。¹⁵⁾それゆえ、彼らの感覚によって支えられた世界を保つために彼らの周囲が閉じたものとして存在するのと並行して、彼ら個々人もまたそれぞれの内に固定され、閉じ込められている。ここでは彼らは固有名詞で示されることなく、「妻」「夫」、あるいは「片方」「もう片方」といったようにそれぞれの特性が限りなく薄められた呼称が用いられているが、このことはむしろそれぞれの個性、越境不可能性を強調する。互いの境界を越えるためには自身のPlatzを完全に離れ、放棄するほかない。それゆえ究極の合一は彼らが彼らの感覚に基づく自己感を持ち続ける限り、決して実現されえない。クラウドイーネにとって家は、その不安定性と閉鎖性ゆえに合一を可能とする空間ではないのである。

固定された閉鎖的な自己の空間は、彼女が物理的に夫から離れ、駅で群衆に押し流されて彼女を中心とした世界の秩序が失われることによって漸次的に変容する。しかしながらこの変容を完全なものにするのは、直接的に彼女の周囲にあって彼女に影響を与える空間ではなく、車窓からの風景という特殊な空間に対する知覚である。

彼女は後ろにもたれかかり、窓の外を眺めた。[……]何か楽しげで軽いもの、壁が開くかのように広がるもの、何か解放されたもの、重荷を減らされたもの、極めて優しいものがそこにあった。彼女の身体からさえ柔らかな重みを取り除かれ、耳の中で

雪解けのような感覚をそのままにしていたが、次第に絶え間ない、ゆるんだ響き以外には何も感じなくなった。[……] 電車の軽く、規則的な揺れ、外の自然のほぐれ、雪解け——まるでクラウドディーネから圧迫が浮き上がったかのようなだった、彼女の頭に突然こう浮かんだ、自分は一人なのだと。(375ff.)

車窓からの風景については軽さと広がりが強調されている。ボルノウが車の中から見風景について述べた以下の主張は、電車においても当てはまる。「それは意味のある現実を失ってしまい、奇妙な絵画的性質に沈んでいる。それは到達不可能な領域である [……]。運転手はもはや徒歩旅行者のように風景の中を移動するのではなく、風景が彼の横を通り過ぎていく。風景は単なるパノラマとなる」。¹⁶⁾ 家の中では、クラウドディーネと夫にとって彼らの周囲の世界は「全方向から寄せる寒さ」(369)のように彼らを脅かし、それによって彼らを寄り添わせるものであった。それゆえ彼らは窓から見える「外のなじみない世界の眺めによって安心する／確実になる」(371)。それに対して車窓からの風景は、その中を実際に歩き、その中で彼女が生きる空間ではないがゆえに、彼女が影響を及ぼしたり、逆に影響を受けたりすることのできる現実性を持たない。¹⁷⁾

現実的な地盤を失った風景は、もはや夫との関係を確実なものにする構成的外部としては機能しない。クラウドディーネから取り除かれる重みや圧迫は、先の引用において彼女と夫との間の感覚による圧迫を想起させる。彼女にとって、自身を現実根付かせるものはこの感覚であったがゆえに、重みが取り除かれた彼女は自分が一人であることを意識し、そのために夫が不在の現実においては自身を定位することがもはや二度とできなくなる。地盤喪失に陥ったクラウドディーネは自身の過去に地盤を見出そうとする。しかし夫が不在の状況での自分という意識は、夫と出会わなかった可能性に目を向けさせ、夫と出会ったのは偶然にすぎないという感覚へと帰結する。これとともにあらゆる過去もまた、前章で述べたように、もはや彼女を定位する地盤とはなりえなくなる。

現実性を喪失した車窓からの風景もまた、先の引用におけるクラウドディーネの部屋と同様に、文字通り足場を失う。軽さは、現実の内で地に足をつけていられるだけの重みをもたないということを意味する。また同時にこれらの風景は、絵画のように平面的なものではなく、それを見る主体がその中に決して到達することのできない空間であるがゆえに、到達しえない遠方と同様に、絶えず遠ざかり続ける無限の広がりを獲得する。

自我における地盤の喪失は、空間内のいかなる場所にも自身を位置づけることができないということを意味する。このときクラウドディーネは「世界においてよそ者である」(382)と感じる。自身のものとして特定の場を持たず、常に外部に存在するということは、車窓からの風景と同様に、決して接近することができず、無限に遠ざかり続けるということを意味する。したがってクラウドディーネの獲得した同定不可能な自我は、到達不可能な、無制限の空間性を有する。夫との合一が果たされる、「彼らが誰にも聴かれず、何にも反響しない音楽であるようなどこか」(379)とはこのような空間を指しているのである。

また、「よそ者である」ということによって主客の構造も変容する。家の中では全てのもの

のが「沈黙し、待ち、彼らのために」(366) あったが、この境地においては彼女が沈黙し、物たちがざわめく。さらに彼女は、現実において存在するためには、周囲の環境や事物、人間からの意味付けを待たねばならない。世界のどこにも自分の住まう場所を持たず、「どこにも故郷のないもの」(416) となったクラウドディーネは、もはや独力では世界の中に人間として存在することはできない。それゆえ、外部から場所を用意してもらうことによって、またそこに滞在することによってはじめて現実の中で、現実にかかわる人間として存在することができるのである。

こうした受動的な存在様式は、無限の受容性と不変性によって特徴づけられる、特殊な非場所的空間を生産する。彼女単独では他から区別される要素を持たず、自己という一つの形を取りえないものであるが、そのために外部からのいかなる刻印をも受け入れることができ、現実においていかなる人間としても現れうる。その際「どんな形をも持たない」クラウドディーネの本質そのものが変容するわけではなく、これは白紙のまま残存し続ける。それゆえ、他の力によって形成された人格を保持しようとしないう限りに於いて、常に新たなものを受け入れ、新たなものとして再生産される可能性が残されている。したがって彼女が取る形はすべて一時的なものにすぎない。「世界においてよそ者である」ということは、常に受動的に存在し、あらゆるものに対して受容性を有するということであり、本来的にはいかなる場所をも取らず、特定の場所での滞在はことごとく一時的なものに留まるということの意味するものである。

しかしながら、「よそ者である」限りは「一人のためのようにだけ存在する」ことはできない。自己の在り方が常に変更可能性を孕むものである以上、また、それが受動的に決定され、主体としての介入が不可能である以上、特定の在り方のみを保持することはできないからだ。それゆえ「全ての人のためのように」かつ「一人のためのようにだけ」存在するためには、受動的な存在の可能性を有しながらも、望む人とのかわりによって形成された姿を能動的に保持することが必要となる。個人性のない場における合一は、クラウドディーネと夫が「誰にも聴かれず、何にも反響しない音楽」のように、どこにもたどり着かず広がり続けるような存在となることによって可能となる。しかし現実の場における合一を可能とする、個人としての彼らは「各々が、相手の魂の中でだけ一つの形を描く音であり、相手の魂が耳を傾けなければどこにも存在しない」(413)。彼らがただ一つの姿でだけ存在することができるのは互いの関係においてのみなのである。彼らは互いの内という決まった場所に住まうことでのみ人間として存在しうると同時に、無限に広がっていく互いの音を捕まえるために、一つの閉じた空間¹⁸⁾ でなければならない。

互いの存在に支えられた、閉鎖的な空間は冒頭の家での描写と重なる。このことは作品全体の構造と無関係ではない。一つの目的のための旅という大枠が示しているように、目的を果たした後は必ず家に戻ってくるのである。「よそ者である」クラウドディーネの内面が「今日はこの人間に、明日はこの人間に貸される〔宿の〕部屋」(417) に比されることは、彼女の受容性と不定性を示すのみならず、彼女が世界の内で仮住まいであることを意味している。つまり、この境地は目標地点ではあるにせよ、永続的に滞在する地点ではないの

だ。

着目すべきなのは、彼らの家が彼らの身体的な感覚によって支えられており、彼ら自身もまた、互いへの傾聴という感覚的な比喻で示される方法で存在していることである。クラウドイーネが個人性のない境地へと広がり出るとき、彼女は世界の中で自身の空間を喪失する。このとき、現実の空間内において自身の位置を確保する身体は、彼女に対して意味付けを行う外部の一部分にすぎない。この意味において身体は他のあらゆる事物同様、彼女の周囲に存在するものであり、無限の彼方へと広がっていく彼女を引きとめることはできない。しかし、彼女が現実に関を下ろし、一人の人間として世界の中に存在しようとするとき、彼女は身体の感覚を通じて一つの空間内へと閉ざされ、固定されるのであり、身体とともに一つの場所に存在するのである。このとき身体は、もはや冒頭の家のように不完全な住まいではなく、帰還するための場となることによって確固たる地盤を獲得する。クラウドイーネは個人を越えた無限の広がりへと出ていくが、合一のために必要なのは広がりへの可能性を有することであり、この可能性を抱いて現実に存在するためには、それを現実に持ち帰らねばならない。個人への回帰によって、外部のものを持ちかえて自身のものにできる空間が形成される。¹⁹⁾ 個人性はここで意味を持つ。『愛の完成』において身体はクラウドイーネを広がりへと連れ出すとともに、この広がり個人レベルに限定する役割を担っているのである。

2. 飛び上がるヴェロニカ：『静かなヴェロニカの誘惑』

2-1. 空洞としての自己

スメリーリの指摘する語りの構造の複雑さ²⁰⁾は、『ヴェロニカ』における、合一を目指す個人の問題性を如実に物語る。語りの視点が複雑に入り組むことによって、ヴェロニカとヨハネスとの差異は一見限りなく薄められているが、それぞれの名前が主体として明示されることにより、この複雑さはかえって彼らが互いの内に溶け込めないことを強調する。『愛の完成』では合一のために作用した自我の不特定性が、『ヴェロニカ』では究極の合一へと高められうる他人との関係をそもそも阻害しているのである。²¹⁾ それゆえ『愛の完成』においてなされるのが自己の徹底的な解体であるとするれば、『ヴェロニカ』で行われるのは自己の徹底的な回復である。『愛の完成』では自己の存続を担保していた時間的連続性が、ここではいわば反転されて用いられている。すなわち、出来事やそれに付随する感情が継続的に引き継がれ、それによって現れる一貫性を有することが、ヴェロニカにとって人間と呼ぶものの最低条件なのである。

ヴェロニカは、ヨハネスがデーメーターに殴られ、殴り返そうとした直後に微笑みを浮かべたことに対して、ヨハネスを獣であると言って非難する。このことは、時間的連続性が人間的存在として認めうるための最低条件をなしていることを明らかにする。

彼女〔村の農婦〕にはもう愛する人というものがなくて、二匹の大きな犬だけだった

の。[……] この二匹の大きな獣はときどき牙をむいて立ち上がるの、ねだるように、尊大に、まるであなた〔ヨハネス〕はこの獣たちと同じかのように、あなたはどのようなわけか獣なの、[……] でも分かるでしょ、次の瞬間一つの身振りで、獣たちはまた獠猛ではなくって、従順に、言いなりになる、獣たちは——いやそれは獣たちだけじゃない、それはあなたで、一つの孤独よ、[……] それはあなたで、毛の生えた空っぽの部屋なのよ。(435ff)

ここで獣の性質として示されているのは異なる態度の即時的な切り替わりである。²²⁾一瞬にして以前を忘却し、対照的な態度に変容する様には、統一的な人格とみなしうるような持続的な核が認められない。それゆえヴェロニカにとって、経験する出来事が連なりを成さず、そのために時間的一貫性を形成する能力を持たない獣は、人格を欠いたものである。

ヴェロニカがヨハネスを獣と断ずるのも、こうした即時的な切り替わりのためである。ヴェロニカはヨハネスの微笑みを、痛みによって引き起こされた不安が原因であると解する。「不安」Angstは、その語源が「狭さ」Engeである²³⁾ことが示すように、制限された (beengend)、自由な行為を可能にする余地のない状態を意味する。したがってヨハネスの微笑みは、理性的な判断による許しではなく、痛みと不安に駆られて、選択の余地なく強いられた行動にすぎない。このとき、主体として考えられるような固有の諸特性は存在しない。この微笑みをきっかけに、侮辱はヨハネスの内に組み込まれる。しかしながら、ヨハネスの人格を形成する一部分として組み込まれるのではなく、「均一化」ausgleichen (434) され、すなわち固有性を取り除かれ、一般化されて取り込まれる。それゆえヴェロニカにとって、ヨハネスの一連の行動は「寛容」weitherzigではなく、「きわめて非人格的」unpersönlich (435) に映る。ヴェロニカはかかる事情からヨハネスに即時的な断絶という獣性を見出しているのである。

この点においてヴェロニカは、自身を一つの人格を持つ人間的な存在として認めるに足る持続的なものを有しているが、一方で、彼女にとって自身の人格はもはや明確な形を持たないものに感じられる。

彼女はもはや強い喜びも強い苦しみも知らず、目立って、あるいは持続して他の感情から際立つものは何一つ知らなかった、それで次第に彼女にとって彼女の人生 (Leben) は一層不明瞭になった。ある日が別の日であるかのように過ぎ去り、ある年が別の年と同じように来た。彼女は、いずれの年もいささかのものを奪い去り、何かを付け加えたこと、自身がその年月の中でゆっくりと変化したことを確かに感じてはいたが、どの年も他の年からはっきりと際立つことはなかった。(447)

ヴェロニカは自身の内面における継続的要素と流動的要素とを自覚してはいる。一方で、平坦な生活の連続によって、過ぎた時間とこれから来る時間とが同様のものに思われる。

このとき、過去・現在・未来は各々から区別されず、時間の一方的な流動性は半ば失われる。この停滞感はヴェロニカ自身の人格に関する感覚を鈍らせる。過去と未来との区分が曖昧になることにより、時間の経過で奪い去られたものと、付け加えられたものととの区別が不明確になるのである。このことによって、人格における経年変化の内実はヴェロニカにとって把握できないものになり、したがって人格における持続的なものも不明確になる。それゆえ彼女は自身の人格をしかと捉えることができないのである。

内容的な自己規定性を喪失していながら、他のものと関係を結ぶことのできない独立性を有するというこの状態は、一種の空間を産出する。人格は所有されるものとしての客体性を有することを先に述べたが、獣性を持つものが空洞のイメージを付与されていることから考えられるように、所有する主体としての自己は中を満たすことのできるような空間であり、その内容物として想定されているのが持続的な個人的特性である。したがって、ヴェロニカにとって人間的な自己は中を満たされた器としてイメージされている。獣においてもこの器の性質は存在するが、それは「ふるいのように」(434) 穴が開いており、決して満たされることがない。

留意しておきたいのは、時間的一貫性が喪失される、つまり器の中身が失われることはあっても、器そのものが完全に失われることはないということだ。このような空間性を担保する器としての自己は、その基盤を身体に置いている。ただし、この自己は物体としての身体そのものではなく、自分自身として同定しうるものに対する身体的感覚の所産である。したがって基本的には、物理的な空間において自身の境界づけを果たす身体に関する感覚がこのような自己の輪郭を形成している。器としての自己は触覚によって形成されており、これが人格を知覚するとき、人格は触覚的に知覚されるのである。それゆえ、器としての自己と人格との不一致が問題となるとき、人格は身体によって直接的には触れられないものとして現れる。

しかしヴェロニカにとっては身体的な境界も漠としたものである。彼女は「自分がかつてどのように自分自身を内側から感じていたのかを思い返すと、かつては丸い、張り詰めた一粒の水滴のようだったのに、いまではもうとっくに小さな、縁の不安定な水たまりのようになっていた」(446)。この感覚には視覚による客観的な輪郭線の認識が伴わないために、確固たる線引きのなされない広がりへと発展する。それゆえ自己の境界線は、皮膚による幾何学的な輪郭線とは無関係に不確定なものとなる。人格と器との両方が不確定なものであるがゆえに、彼女は「自己でないもの」の排除によってのみ自己を保持しうるのである。

一方でこの境界線は「何か比べ物にならないほど柔らかいものが〔……〕内側から彼女にぴったりと合うような手ざわり」(446) によって回復されうる。つまり、器としての自己が人格の領域を規定している一方で、人格の側からも器の輪郭線の画定が行われるのである。

それゆえ触覚的に形成されたイメージは、人格を引き寄せ、自己をそのイメージと一体化させる力を持つ。かつて犬に顔を舐められ「まるで彼女自身も一匹の獣であるかのよう

に」(445) 感じたことが原体験となって、犬の舌に類似した感覚はヴェロニカに同様の感覚を繰り返し抱かせる。このとき、人格形成に必要な蓄積が回復されるわけではないにもかかわらず、ヴェロニカは自分自身を感じていいる。²⁴⁾ この感覚は蓄積によって形成された個人性を一般的な諸関連に帰すると同時に、触覚的にヴェロニカを輪郭づけもするのである。このときヴェロニカの中の獣性は「彼女の中では獣らしさが何もなく、彼女の魂に及ぼすその効果としての確かな線しか」(462) ない。ここで獣は、自己を持たない存在から、境界づけを行う空洞としての自己を持つ存在へと転換される。この自己は、その内容によっては何者であるとも定義できないものであると同時に、その輪郭によって他者から区別された領域を有する、両義性を持つ存在である。個別的内容を持たないために、空洞である自己は身体感覚を通じてのみ獲得されうるのである。

したがってこのとき、輪郭線の破棄によりいかなる場所をも取らない『愛の完成』とは対照的に、『ヴェロニカ』では輪郭内部の不特定性によりあらゆる場所へと拡大することで個人性の超越が可能となる。このことはパースペクティヴの変化に明確に表れている。

夢は一人の人間の内にあるものではない、現実の断片なのでもない、そうではなく夢は一つの総体的な感覚のどこかで自分の場所を湾曲させ、そこで生きているのだ、漂いながら、重みもなく、ある液体が別の液体に混ざっているように。夢の中で人は愛する人に身を捧げる、ある液体が別の液体に混ざっているように。ある変容した空間感覚で。というのも目覚めた魂は空間の中にある、一つの埋めることのできない空洞だからだ、空間は気泡だらけの氷のようにでこぼこになってしまうのだ、魂によって。(461)

魂という語によって示されているのは、自己からの身体の分離である。『ヴェロニカ』における魂は、「子供と死者は魂を持たない」(460) という表現で端的に説明される。子供と死者は「まだ何者でもない、あるいはもう何者でもない」がゆえに魂を持たない「空の器」(461) である。したがって魂は、先に確認した人格と同様、蓄積によって形成される意思決定の主体であると考えられる。しかしながら、人格が感覚される客体であるのに対し、魂は感覚そのものを統御している。魂は主体に対して空間感覚を制限し、空洞すなわち死角を作り出すことで空間の完全な把握を妨げる。出来事を「積み重ねる」schichten ことによって形成されている魂は、感覚に対して一つのパースペクティヴを定め、その中で秩序づけを行うものだからだ。²⁵⁾

これに対して夢の中では、感覚に方向性を与える魂が一切欠けていることがありえる。²⁶⁾ このとき、感覚は世界の中でただ一つの定まった視点を持つのではない。夢は総体的な感覚のどこかで自分の場所を「湾曲させる／アーチ形にする」wölben という箇所に着目したい。夢はwölbenすることによって、総体的な感覚によって縁取られた一つの空洞を形成する。これは夢による、本来的に魂の占める場所の占有であるが、一方で、特定の立脚点を持たないがゆえに、夢がこの場所を満たすことはない。また、この場所は特定の位置を占

めるものではなく、感覚が到達しうる場所であればどこにでも存在可能なものである。夢においては、もはや身体的に画定された領域さえも持たない無限の広がりが見えられ獲得される。しかしながら夢の中では、感覚が身体性を欠いているために、現実として存在するための足場を持たない。それゆえムージルは「夢見と目覚めとの間の未知なる領域」(459)という、個人を超越した高い視座を持ちながらも現実的な空間に身を置く統合的な場を定めているのである。

この中間領域において、ヴェロニカは「周囲の世界についての感覚が変化した」(459)と感じる。これは夢の中で有する「変容した空間感覚」を現実において有することに他ならない。ヴェロニカは「神という言葉で彼〔ヨハネス〕はあの別の感覚のことを、おそらくは彼がその中で生きたい、そんなある空間についての感覚のことを言っているのだ」²⁷⁾(463)と考え、この空間感覚をヨハネスの神という言葉と結びつける。彼女はこの語を以下のように解釈する。

じゃああなたの中にも、あなたがはっきりとは感じられず理解することのできない何かがあって、あなたはそれをただ神と呼んでいるのね、あなたの外にあって、現実として考えられる、あなたから離れた、そうならあなたの手を取ってくれるかのような。[……] あなたは何かいわば向けられるもののない方向にだけ、いわば動かされるもののない運動にだけ、あなたの中で決して現実的な生へと立ちのぼることのない生にだけ、神という言葉を使うのね [……]。(430)

神という言葉で示されているのは、本来個人の内にあって人格といった傾向ないし方向性を持たないもの、個人を一つのパースペクティブに置いておくことを許さない内面的な「何か」である。ヨハネスはこの「何か」を言語化することによって外部化し、確固たるものにしようと試みるが、「彼がそれを口に出したとき、それは無価値になった概念であり、彼の思ったことを何一つ言い表していなかった」(429)。これは言語による直接的な表現の、あるいは看取の不可能性を示している。身体を通じてこの「何か」と一体化することによってのみ、これを「空間感覚の変容」という形で外部化し看取することができる。この「何か」が神と結びつけられることによって、人格性を持たない空洞を自己として身体化すること、それによって個人を超越した高い視座を現実において獲得することは、受肉のイメージを付与される。ムージルはここで神学的な意味²⁸⁾を引き継いでも、転移してきているのである。

夢見と目覚めとの中間の領域にあって「ヨハネスを自分自身のように近くに感じる」(464)ヴェロニカはしかし、「こんなにも触れられるほど感覚的に感じているのは、ヨハネスではなく自分自身にすぎない」(465)と予感する。そもそもヴェロニカはヨハネスが死ぬことによって合一が可能になると考えていた。死者は魂を持たず、「もはや何者でも」なく、「あらゆるものであった」と考えられるがゆえに、「彼らはがらんどうの現実のように空の器であり、夢に彼らのかたちを貸してくれる」(461)からだ。ヴェロニカは、不在のヨハネス

の死を想像しながら、「視線を針のようにかすかに彼の中に滑り込ませる」(462)。²⁹⁾ 視線はもはやヴェロニカ個人の視野を越えて、無限の彼方にまでヴェロニカを運んでいく。しかしこの時点では、ヴェロニカにとってヨハネスは「境界を無力化されて」(463) いながら「彼の魂は自分自身についてだけの感覚の中にまだ隠されて」(463) いるように感じられる。このときヴェロニカは、ヨハネスという外部ではなく、自身の身体へと向かう。彼女は「ただ自分自身のためだけに、ただ自身と近くにいるという感覚、自分自身と暗い部屋に一人きりでいるという感覚のためだけに」(466) 服を脱ぎ、自分自身の身体の熱がまだ残っている服を再び身に着ける。その際、際限のない広さへと接続していたヴェロニカの身体が、身体の輪郭線という「覆いにぶつかったとき」(466)、ヴェロニカは「性的快感」*Sinnlichkeit* を覚える。性的な快楽の感覚は「自身を自身の内へ閉ざすことを[……] 性的接触のように感じた」(451)、「それによって自分自身を感じる性的快感」(467) と繰り返し自己へと向かう感覚に基づくものであることが示唆される。この快楽はヴェロニカが単独で感じているにもかかわらず、自慰としてのものではない。自己の結実の快楽であり、神との合一の快楽であるとも言える。また、ヨハネスとの合一が完全に果たされたとヴェロニカが感じるのは、ヨハネスは自殺していないという確信が夜明けとともに強まるときである。ヴェロニカは空間の変容を感じたとき、「ヨハネスも今こんな感じなのだと、このような現実、変容した空間にいるのだと」(460) 感じる。つまりヴェロニカとヨハネスとの合一は、彼らがそれぞれ単独に「受肉」することによって、神という場において果たされるのである。

2-2. 閉鎖空間としての個人

『愛の完成』においては主人公クラウドディーネが家を出て旅をするのに対し、『ヴェロニカ』では作品全体がヴェロニカの家のみにおいて完結する。この相違は、両作品間で合一の空間性が異なることを端的に示している。『愛の完成』では個人の空間の破棄により、『ヴェロニカ』では個人の空間があらゆる場所を包括することにより個人性の超越がなされるのである。しかし個人の境界線が決して失われないとすれば、合一に際して身体的に規定された個人の領域はいかなるものとして作用するのだろうか。『ヴェロニカ』においてなされる領域画定の変遷についての分析がこの問いに関する考察を進展させるだろう。

ヴェロニカの内外にはヴェロニカ自身を中心とした同心円状の閉鎖的構造が見られる。その最外部にあたる家はヴェロニカおよび家の住民たちの領域として確立されているが、これは自他相互間の排除によって成り立っている。

デューメーターはこう言った。「僕たちはしたいことをしていいんだ。僕たちはあまり金を持っていないけど、ここらでは一番古い家だ。僕たちは違う生き方をしている、ヨハネスは入省しなかったし、僕は軍に入らなかった。聖職者にさえ彼はならなかった。彼らはみんな少し僕らを見下している、僕らは金持ちじゃないからね、でも僕たちは金を必要としないし、僕たちは彼らを必要としない。」(436)

ヨハネスとデーメーターは職に就かないことで、ヴェロニカと叔母は未婚であることによって、外部の世界に対して没交渉である。かかる事情と経済状況によって、彼らは社会からも彼らの住む村の住民たちからも「浮いた」fremd 存在となっている。この線引きは、家の住人たちの排他的な姿勢によって強化される。社会に属さない彼らにとって、家はもはや教会や広場など社会的に規定された中心をめぐる存在するのではなく、家がまさしく世界の中心なのである。『ヴェロニカ』において唯一家の外で展開される場面では、家から出ていく描写がなく突然戸外に切り替わるのに対して、家へと戻る場面は描かれていることは注目に値する。彼らの家に通じる道は、住人が家に戻る道しか存在せず、彼らの家は内部に対しても外部に対しても強固に閉ざされているのである。しかしながら、この領域は自他の領域をはっきりと境界づけることを第一義とするがゆえに、境界線は堅固ではあるものの、領域内のものを本質的に規定するものは何もない。それはまるで蛹の中身のように、境界線によってのみ保持されているにすぎないのである。

家と外界との間にある庭は、この両者の境界の役割を果たしている。ただしこの境界は、広がりを持つ庭である以上、幾何学的な線ではなく、内と外の両方を内包した空間である。庭では内と外とが一時に、かつ混合して知覚されている。それゆえ、主観的な内と外との境界線もまた曖昧なものとなり、「飛び起きたいと思っても、甘い混ざり合いの中に緩んで」(437) しまう。この中間的な空間では、自他を境界づける自身の輪郭もまた失われてしまうのである。ただし、この自己喪失は作品のテーマである「合一」を意味するものではない。ヴェロニカの目指す合一は、他人と関係を結び、その関係の内に完全に溶け込むという類のものだからだ。³⁰⁾ この庭での混ざり合いは、自他が相互に関連を持つこともなくただ混ざり合っているにすぎない。それゆえ、庭は「足を踏み入れようとするとその中で沈んでしまう」(437) 海のように感じられる。確固たる人格の内容を持たないヴェロニカは、「自己でないもの」の強調によってのみ自己の領域を感覚しているのであり、したがって能動的に他者を排除しているというよりも、自己の領域画定の必然性から家の中に閉じ込められ、孤立せざるをえないのである。ヴェロニカにとっては、外の人間を排除することもまた「あらゆるよそ者を嫌悪するよう強いられている」(448) からに他ならない。³¹⁾

このように排除によって「私たち」という領域を構築している彼らにとっては、「私」の領域もまた、閉鎖的なものにならざるをえない。外界に対し閉鎖的な家と同様に、彼らの各々もまた、互いに切り離され、閉ざされている。

人は出来事のようなもので、行動する人格のようではないということだけが重要なよ。人は誰でも、起こることに対して一人きりであらねば (allein sein mit dem, was geschieht) ならないし、同時に一緒にいなければ (zusammen sein) ならないのよ、一つの空間をなす、窓のない四つの壁の内側のように、黙って、閉鎖的に。この空間の中ではあらゆることが実際に起こりうるけれど、それでもやっぱりある空間から別の空間へ達することはない、まるで思考の中だけで起こったみたいに…… (439)

ここでは個々の人間が先の引用における家と同様の空間的イメージで捉えられている。家がヴェロニカたちの領域の外郭をなしているのと同様に、人間は「共同的に、集まって」zusammen 出来事が起こる場の輪郭を形成している。しかしそれは同じ時空間を共有しているということだけでなく、個々の人間同士の間には断絶がある。ヴェロニカたちの家で起きる出来事が、外部の人たちには関知しえないがゆえに「現実的にはほとんど存在しない」(438)、そこから互いに中の様子をうかがうことのできる「窓」を持たないように、各個人もまた、互いに越境不可能なものとして閉じられている。

また、この閉鎖性は出来事に対しても向けられている。「起こることに対して一人きりであらねばならないし、同時に一緒にいなければならない」という箇所は、人は出来事を「相手取って」mit 一人きりであり、同時に出来事と一緒にいなければならない、と解釈することもできる。確かに、作中において、出来事やそれに伴う感情等は個人の「自分はしかじかの人物である」という感覚を決定づける主たる要因である。しかしその一方で、個人は侵入不可能な空間として出来事から切り離されてもおり、したがって出来事に左右されることも、出来事を左右することもない独立した存在でもあると述べられている。『愛の完成』においては、意識的に自己と出来事とを分離することによって非個人的な領域へと到達することが目指されたが、『ヴェロニカ』においてはこの分離が必然的に付随するものとして扱われている。このことによって人格の形成は本来的に阻害され、個々人が相互に関係を結ぶことが不可能になっているのである。

さらに、閉鎖の構造は外部に対してだけではなく、一個人の内部においても存在している。この構造はヴェロニカの身体と内面性との間に現れる。

彼女は不明瞭な、流動的な自己感を抱き、自身に内的に触れると、おおよそにしかわからない覆い隠された形の交替しか感じられなかった、覆いの下になにか動くものを、意味を押し量れぬままに感じるかのよう。(447)

『ヴェロニカ』では、身体が自己の外部に存在する物体であるか、自己に内包されるものであるかは問題にならない。前章で述べたように、心理的なものとしての人格は身体によって所有されるものであるし、それを所有するという点で、身体は主体であるからだ。また、身体はそれ自体空間における自他の境界である。それゆえ、いかにその感覚が漠たるものであったとしても、ヴェロニカが自身のものであると言っているのは身体を措いて他にない。³²⁾ 内面的なもの、すなわち人格も確かにヴェロニカ自身ではあるのだが、これを所有するところのヴェロニカは、これにじかに触れることができない。ヴェロニカの自己において身体は、窓のない壁とまではいかないものの、「柔らかい布切れ」(447)のような覆いで精神的なものからは隔てられているのである。

先に述べたように、身体において自己が感覚されるに至ったとき、はじめて合一は可能となる。このとき、個人の内面における閉鎖性は消失するが、外界に対する閉鎖性は完全に失われるわけではない。

彼女と物たちとの間の空虚な空間が消失し、奇妙にも関係が張りつめられた。家財道具は、動かすことができないかのようにどっしりと腰を据えていた、——机と戸棚が、壁にかかった時計が——それ自体によって完全に満たされていた、彼女から引き離され、丸めた拳のように自身の内に固く閉ざされていた。しかし一方でときおり物たちはヴェロニカの内にいるかのようなようだった、あるいは物たちは彼女を目で見るかのように見ていた、ヴェロニカと空間との間にあるガラス板のような、一つの空間から。(459ff.)

内面的なものが身体にとって杳として知れぬものであったとき、「物たちはどんどん後退ってその表情を失い、彼女の自己感もいっそう深く彼方へと沈んでいった。その間には空虚な、途方もない一つの空間が残り、そのなかで彼女の身体は生きていた」(447ff.)。この際、内面的なものと身体とが分断されているのと同様、身体と身体の周囲の物たちの間にも関連はない。しかし先に述べたように、ヴェロニカが空洞である自己を身体において感じたとき、この空間感覚は変容し、個人の視界を越え、身体感覚を通じて無限の広がりへと出ていくことができるようになる。このことにより、ヴェロニカと外部を隔てていた越境不可能な空間は消失し、相互に関係をもつことができるようになる。このとき、ヴェロニカは周囲の物たちを自身の内側に感じる。ここには外部に対する構造の逆転がみられる。身体に基づくただ一つの固定された視点を持つのではなく、すべてを見晴らすことのできる、個人を超越したより高次の視点を獲得することによって、もはや視線は身体という主体を基点とはしなくなる。家をはじめとしたいくつもの外郭の内部に閉ざされていたヴェロニカは、ここで自らが包み込む側へと転じるのである。

ただし、ある程度の閉鎖性は保たれている。境界を超えることが可能になってもなお、物たちと彼女は引き離され、分断されてもいる。しかし分断のされ方は異なっている。ヴェロニカと外部の物たちとの間にあるのはもはや「窓のない壁」ではなくガラス板である。ガラス板は、壁と同様通り抜けることはできないが、ガラスの向こう側は見える。つまり視覚だけはこの仕切りの向こうの「別の空間」へと達することができるのである。

また、この仕切りは単なる障壁として存在するのではない。ヴェロニカが個人を超越した視界を得るとき、「飛び上がる」*aufspringen*、「舞い上がる」*sich heben* といった表現によって、高みへと登りそこから見下ろすような鳥瞰的空間がイメージされている。しかしながらヴェロニカは、自身を中空にする、方向性を持たない「何か」のためにめまいに襲われる。³³⁾これを高所性めまいとして捉えることもできよう。すなわち、自身の立っている基盤を見失い、落下することへの危機的感情である。それゆえ「彼女の足指が床板の継ぎ目にしがみつき、そこで細かくやわらかな埃に触れたとき、あるいは彼女の足の裏が床の小さな整えられていないでこぼこを感じたとき」(472)、すなわち身体によって確固たる地盤を感じたときに、めまいは和らげられるのである。

したがって越境ないし合一の際に自己が身体から離れたり、身体性が失われたりするのではない。身体はその感覚によってヴェロニカが自身の領域から出ていくことを可能にす

る一方で、視界を限定することによって常にヴェロニカの存在の基盤を与え続けるものからだ。『ヴェロニカ』において、身体は自己における唯一外に開かれた窓としての役割を果たすと同時に、一貫して自己を一つの場に結びつける閉鎖的な空間なのである。

結

以上、身体とそれに紐づけられた個性が作中においていかなるものとして存在しており、これらへの帰還がいかなる意味を有するのかを明らかにすることを試みた。その際重要となるのが時空間とのかかわりであって、これを組み込むか、切り離すかによって個人の存在も身体を持つ意味も左右される。身体感覚は時空間と密接にかかわり合う限りにおいて個人を形成しており、これらを分離する場合には個人を制限のない場へと連れ出す通路となり、存在することの必然性から個人を再び現実の時空間に結びつける「住まい」となる。

いずれの作品においても、時間は内的・心理的な自己像の主たる構成要素として扱われている。『愛の完成』においてはそれが一つの可能性への限定を意味するがゆえに外部化・身体化された。『ヴェロニカ』においては時間的要素が希薄であるがゆえにはじめから内的な自己像と身体を通じて形成された自意識とが分離していた。両者に共通しているのは、合一の際に時間とのかかわりが取り除かれていること、それが身体を通じて可能となるということである。

また、時間との関係は周囲の空間に影響を受けて変化し、同時に時間との関係に応じて周囲の空間に対する感覚も変化する。時間の連続によって一つの可能性に固定された自己に苦しむクラウドイーネは、家という自身に固有の空間を出てはじめて時間的要素を外部化し、広い可能性へと開かれることが可能となる。自己を確固たるものとして感じられないヴェロニカは、閉ざされた家に留まることによって、閉鎖性の内に他者に達しうる自己を見出す。この差異は彼女自身の持つ空間性にも表れている。クラウドイーネは自己の領域を放棄し、そのことによって境界線のない無限の広がりを獲得する。他方ヴェロニカは、何者でもないものとして自己を感覚することによって、あらゆるものを含み持つ可能性を孕む輪郭を持った空間へと至り着く。前者はすべてに溶け込む、後者はすべてを包含する空間なのだ。このとき身体は、前者においてはどこにも視点を持たないことにより、後者においてはすべてを見渡すことのできる高い視座を持つことにより、あらゆるものに対する感覚をもたらす。

身体が必ずこうした超越的な視界から限定的な視界へと主人公たちを連れ戻すということは、個人が必然的に有する、超個人的な領域に「住まう」ことの不可能性だけを意味するのではない。どちらの作品においても、自己は主人公たちが「住まう」場所としての不完全性を示していた。超個人的な領域に至り、そこから帰って来る場所となることによって、身体と身体的に構築された個性は人間が真にそこに「住まう」家として規定されるのである。また、こうした領域から個人へと戻ってくるということは、常にこの

領域へと至る可能性を現実の場において有するということを意味する。個人への帰還は、外部のものを持ちかえり自身のものとするのできる空間を形成するのである。

対称的な出発点、対称的な道程を持つ二つの物語は、非個人性への進出と個人性への帰還との二点で交わる。ムージルが『合一』を「二重ピラミッド（双角錐）」³⁴⁾に喩えたことが示すように、この二つは鏡合わせのような対称性を持つというだけでなく、一点から広がり、また一点へと収束する構造を有している。一つの球の上に引かれた二本の円周のように、『愛の完成』と『ヴェロニカ』は、合一という同一の中心を「めぐるもの」（428）なのである。

注

- 1) Robert Musil: *Die Vollendung der Liebe*. In: *Gesamtausgabe*. Hrsg. von Walter Fanta. Bd. 7. Salzburg und Wien: Jung und Jung 2019, S. 365ff. なお、煩瑣を避けるため引用に際しては括弧内に頁数のみ示す。
- 2) Robert Musil: *Die Versuchung der stillen Veronika*. In: *Gesamtausgabe*. Hrsg. von Walter Fanta. Bd. 7. Salzburg und Wien: Jung und Jung 2019, S. 427ff. なお、煩瑣を避けるため以下『ヴェロニカ』と略記し、引用に際しては括弧内に頁数のみ示す。
- 3) 古井由吉『ロベルト・ムージル』、岩波書店、2008年、84頁参照。
- 4) 北島玲子「沈黙への通路：ムージルの『合一』における皮膚＝身体」、上智大学ドイツ文学会『上智大学ドイツ文学論集』第39号（2002）、117-144頁。
- 5) Vgl. Fred Lönker: *Poetische Anthropologie. Robert Musils Erzählungen Vereinigungen*. München: Wilhelm Fink Verlag 2002, S. 152.
- 6) クラウディア・ベンティーン『皮膚：文学史・身体イメージ・境界のディスコース』、田邊玲子訳、法政大学出版局、2014年。
- 7) 「他の人が自分自身を有するところ（wo andre sich selbst haben）にあるこの空虚。」（434）
- 8) Robert Musil: *Tagebücher*. Hrsg. von Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Verlag 1976, S. 213.
- 9) Vgl. Artikel ‚TREU‘. In: *Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm*. Bd. 22. München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1984, Sp. 243.
- 10) 夫との関係を強化するものとして作用しない過去は「総じて忘れられ」（373）、クラウディーネを形成する連続性の内から排除されている。
- 11) Friedrich Kaulbach: Artikel ‚Leib, Körper‘. In: *Historisches Wörterbuch der Philosophie*. Bd. 5. Hrsg. von Joachim Ritter. Basel: Schwabe 1998, Sp. 173-174.
- 12) 形容詞 *leibhaft* を手がかりに想起と身体との関連性を指摘するレーンカーでさえ、この区別を見落としている。Vgl. Lönker, S. 152.
- 13) 「ひとりの相手を三人称複数の代名詞 *sie* で呼ぶことには、敬意の『虫めがね』（複

数で扱うこと)と『遠めがね』(三人称で扱うこと)との両方が同時に用いられている。」高田博行「敬称の笛に踊らされる熊たち」、高田博行、椎名美智、小野寺典子編『歴史語用論入門』、大修館書店、2011年、150頁。

- 14) Vgl. Gerhard Neumann: *Landschaft im Fenster. Liebeskonzept und Identität in Robert Musils Novelle „Die Vollendung der Liebe“*. In: *Neue Beiträge zur Germanistik*. Bd. 3 (2004), S. 15-31. なお、ノイマンが『愛の完成』を「風景への変化する眼差しの中にある程度「反映」される夫婦間のラブストーリー」とみなしたのに対し、空間そのものによる主体の空間感覚への作用に焦点を当てるという点において、本論は視点が異なる。
- 15) Otto Friedrich Bollnow: *Mensch und Raum*. 8. Auflage. Stuttgart: Kohlhammer 1997, S. 42ff. なお、訳出に際しては以下の邦訳を参照した。オットー・フリードリッヒ・ボルノウ『人間と空間』、大塚恵一、池上健司、中村浩平訳、せりか書房、1980年。
- 16) Bollnow, S. 108.
- 17) スメリーリは『愛の完成』における列車旅全体が専ら視覚的知覚に占められていることを指摘している。Vgl. Fillipo Smerilli: *Moderne-Sprache-Körper. Analysen zum Verhältnis von Körpererfahrung und Sprachkritik in erzählenden Texten Robert Musils*. Göttingen: V&R unipress 2009, S. 79.
- 18) スメリーリはクラウディーネの名前がラテン語の *claudere* (schließen, verschließen) に由来することを指摘している。彼はクラウディーネの開放性 (Öffnung) との対称性を指摘しているが、この語源的関連性が意味を持つのはむしろこの点においてではないだろうか。Vgl. Smerilli, S. 229.
- 19) 作中で参事官との性行為が厳密には行われていないことは、帰る「家」としての夫との関係を破壊することなく、普遍的なものへの可能性を宙づりにすることを意味する。
- 20) 「話す主体と想起する主体の転換により語りの関係がより込み入った、複雑なものになっている。[……]つまりヨハネスはヴェロニカとの会話を想起するが、その会話の中でヴェロニカは彼女とデーメターとの会話を想起している。さらにヨハネスは、ヴェロニカがこの会話の中でデーメターとヨハネスとの会話を想起していることを想起している [……]。」(Smerilli, S. 121.)
- 21) 北島、130頁以下参照。
- 22) 獣についてのこのような規定は、ニーチェの獣に関する言及と一致している。Vgl. Friedrich Nietzsche: *Unzeitgemäße Betrachtungen*. München: Goldmann Verlag 1992, S. 77.
- 23) Vgl. Artikel ‚ANGST‘. In: *Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm*, Bd. 1. München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1984, Sp. 358.
- 24) Vgl. Musil: *Die Versuchung der stillen Veronika*, S. 463.

- 25) 蓄積されたもの (Geschichte) が感覚を方向付けるという主張はニーチェのものと共通している。Vgl. Nietzsche, S. 106.
- 26) Vgl. Ernst Mach: *Die Analyse der Empfindungen und das Verhältnis des Physischen zum Psychischen*; 9. Auflage. Jena: Verlag von Gustav Fischer 1922, S. 3.
- 27) 原文は斜体による強調。
- 28) 「言^{ことば}は肉体となりて我らの中に宿りたまへり」(ヨハネ1:14)、『文語訳新約聖書：詩篇付』、岩波文庫、2014年、204頁。
- 29) この箇所を「男／女＝貫通者／被貫通者」の構造の逆転と捉えることもできよう。
- 30) 「でも私が考えているのは、互いにそうであるというもののなかに完全に溶け込むような性質のものなの」(438)
- 31) 赤司は『ヴェロニカ』の前身である『魅せられた家』との比較から、外的・社会的な現実から切り離された場にあるということ自体によって「自己同一的主体としての個人という近代的思考が効力をなくす」と指摘している。赤司英一郎「理念のための感覚^シの島が生まれる——『静かなヴェロニカの誘惑』の成立について——」、鎌田道生編『ムージル 思惟する感覚』、鳥影社、1995年、77頁。
- 32) ただし、身体上での他者との合一が不可能というわけではない。14歳の頃、ヴェロニカは犬の舌が頬に触れるのを知覚したとき、自身も獣であるかのように感じる。この際、犬の舌はペニスのイメージと重ねられて描写されている。北島はこの描写を「皮膚を介しての他者との官能的な合一体験である」(北島、132頁)と論じている。この出来事が『ヴェロニカ』における合一の原体験となっていることは留意すべきである。
- 33) 「それから彼女をめまいが襲った、そのめまいは、彼女がもはや知覚することのできないあの考えに由来していた」(472)
- 34) Robert Musil: *Über Robert Musils Bücher*. In: *Gesamtausgabe*. Hrsg. von Walter Fanta. Bd. 9. Salzburg und Wien: Jung und Jung 2019, S. 175.

* 本論文は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2136 の支援を受けたものです。

Grenzüberschreitung und Rückkehr

— Der Körper in Robert Musils *Vereinigungen* —

Nami OHNO

Diese Abhandlung beschäftigt sich mit Robert Musils Novellenband *Vereinigungen* (1911), der die beiden Novellen *Die Vollendung der Liebe* und *Die Versuchung der stillen Veronika* umfasst. Bei der Erörterung dieser zwei Werke, die jeweils eine nach der Vereinigung mit dem Geliebten strebende Heldin zeichnen, ist der Begriff des Körpers von großer Bedeutung. Einerseits steckt der Körper den Bereich einer Person ab und unterscheidet sie von den anderen, andererseits vermittelt der Körper durch die Gefühle zwischen Außen und Innen. Die bisherige Forschung untersuchte den Körper vor allem als Instanz, die zwischen dem Individuum und dem Unpersönlichen vermittelt und so eine Vereinigung erzielt. Es wurde darauf hingewiesen, dass der Körper mit dem Identitätsproblem verbunden ist und dass durch die Metaphorik des Körpers betont wird, wie die unpersönlichen äußeren Elemente die Person bilden.

Aber in beiden Novellen wird die Rückkehr in den Bereich einer Person, der durch die körperlichen Gefühle gebildet wird, nach dem Moment der überpersönlichen Vereinigung dargestellt. Welche Bedeutung hat es, dass der Körper eine Person durch die Gefühle zurückruft, obwohl die Vereinigung durch den Verlust der Körperlichkeit und den damit verbundenen Verlust der Persönlichkeit möglich wird und die in enger Beziehung zum Körper stehende Persönlichkeit von den unpersönlichen Elementen gebildet wird? Wenn die körperlich bestimmte Persönlichkeit Bedeutung hat, so dürften der Körper und die durch ihn bestimmte Persönlichkeit eine andere Eigenschaft haben, die weder Vermittlung noch Hindernis ist. Diese Abhandlung versucht die Wichtigkeit zu demonstrieren, die eine begrenzte Person und der Körper, der dieser Person Bewusstsein verleiht, haben.

Das erste Kapitel hat *Die Vollendung der Liebe* zum Gegenstand und untersucht, welche Rolle die mit Körper verbundene Persönlichkeit bei der Vereinigung spielt. Der erste Absatz betrachtet, mit Schwerpunkt auf dem Verhältnis zur Zeit, wie eine Person sich herausbildet und als welche diese in der Novelle existiert, denn Vergangenheit ist mit dem Körper verwoben, solange Vergangenheit als das das Ich bildende Element betrachtet wird und die sich selbst von anderen unterscheidende Grenze formt. Der zweite Absatz betrachtet, in welchem Raum die Vereinigung möglich und unmöglich ist, und welche Räumlichkeit eine Person in dem Raum hat, in dem die Vereinigung möglich ist, wobei der Schwerpunkt auf das Verhältnis zwischen Raum und Sinneswahrnehmung gelegt wird. Der Zustand des Fremd-Seins steht im Vordergrund der Ausführungen. Durch den Vergleich zwischen Zuhause-sein und Im-fernen-Land-sein wird deutlich, dass der Zustand, im fernen Land zu sein, nicht

nur die Änderung des Ortes, sondern auch den Verlust des Wohnorts für die Menschlichkeit bedeutet.

Im zweiten Kapitel ist *Die Versuchung der stillen Veronika* Gegenstand der Betrachtung. Während sich *Die Vollendung der Liebe* um die Einschränkung des wirklichen Selbst dreht, handelt *Die Versuchung der stillen Veronika* davon, dass die Beziehung zu dem anderen nicht geformt werden kann, weil das Gefühl des Selbst undeutlich ist; also handelt der erste Absatz ab, wie das Selbst in dieser Novelle bestimmt wird. Das denkende, handelnde und entscheidende Subjekt in diesem Werk ist auch das des Objekts, von dem man besitzt wird. Diese Abhandlung nennt das denkende Subjekt das Sich als Person und das besitzende Subjekt das Sich als Gefäß. Das erste knüpft sich an die zeitliche Kontinuität, das letzte an den Umriss des Körpers. In dieser Novelle wird gezeigt, dass beide wechselseitig das Selbst bilden und dass das Selbst als solches sein kann, wenn sich beide in dem Körper vereinen. Hier wird der Körper zur Grundlage, auf der man in dem Raum existiert. Also zeigt sich paradoxerweise, dass die körperlich formende Vorstellung auf das Selbst abfärbt. Durch diese Vorstellung wird die Person zum Inhalt des Gefäßes, obwohl sie nichts hat, was dessen Inhalt werden könnte, und das ambivalente Sein einer Person, die Niemand ist, wird möglich. Der zweite Absatz richtet sein Augenmerk auf die Verslossenheit, die sich in dieser Novelle konsequent bewahrt, und behandelt die Veränderung der Bedeutung der Verschließung. Dieses Kapitel zeigt: Der Körper spielt nicht nur als Zugang, der das Individuum auf eine überpersönliche Höhe hebt, eine Rolle, sondern auch als sein eigener Ort, der das Individuum an eine Perspektive bindet, um es aus der mit der Höhe unweigerlich verbundenen Gefahr zu retten.